

縄文文化の起源と時代区分について

島 立 桂

はじめに

しばらくは、コロナ禍の影響で、仕事帰りに数人の方々と飲むことも、そうした場で議論することもなくなってしまったが、数年前までは、飲みながら、縄文文化の起源や時代区分について議論することがあった。そんな時、困ったことは、筆者と話し相手の方々の間で、「縄文文化」に対する考えに共通認識がなかったことである。そのため、はじめに筆者の考えを説明しておかないと、その後の議論に進めない、あるいは、議論がまったく噛み合わないといったことが幾度となくあった。お酒が入っているのだから、なおさら収拾がつかなくなり、ルールのない異種格闘技さながら、「もう、お前の顔なんか二度と見たくない」と喧嘩別れをして、ほとぼりが冷めたころ、また飲みながら続きの議論をする。そんなことを懐かしみながら、本稿では、筆者の立ち位置を表明することを目的とする。そして、筆者とは見解の異なる多くの方々には、ぜひとも反対意見を表明していただきたい。

1 時代区分について

時代区分については、古くは濱田耕作の『通論考古学』以来、考古学の概説書から研究論文に至るまで、数え上げたらきりがなくらい、議論されてきた。

そうした中で、考古学研究会の総会や研究集会などで、時代区分について発言されてきた近藤義郎は、時代区分について、「これまでの日本考古学は、明確な言葉で規定したことはないが、あえて述べれば、「特徴的で、重要で、普遍化していく考古資料」の出現をもって画期が設定され、時代が区分されてきたように思う」として、具体的には、「縄文時代の開始は土器の出現をもって、弥生時代の開始は水田遺構、水路、木製農具、石庖丁、木製農具をつくる石製ないしは鉄製工具、稲粃のうちのすべて、またはいくつかの組合せの出現をもって・・・以下省略」（近藤 1986b、17-18頁）と記述している¹⁾。

明快でわかりやすく、例外のほとんどないような規定と考えられるが、どこか物足りなさを感じる。

確かに、考古学の定義が、「過去人類の物質的遺物を研究する学」（濱田 1922）であるならば、考古学の時代区分も、「抽象的な概念」によってではなく、「もの」（遺構、遺物）によって規定すべきなのかも知れない。しかし、そうは言っても、考古学は、終始「もの」にしがみついているわけではない。「もの」からはじめた研究であっても、抽象的な概念へと昇華されることだって、あり得ることではないだろうか。

また、土器の出現と水田稲作関連の遺構・遺物群の出現とによって画された縄文時代は、どのような時代なのだろうか。これは、もはや自明のことなのだろうか。それとも、単純かつ明瞭な「もの」によって時代を区分しておいて、その内容は、これから解明していくということなのだろうか。

時代名称については後で触れるが、土器の出現をメルクマールとする無土器時代、先土器時代、あるいは先縄文時代などの時代名称は、研究を進める上での暫定的なものではなかっただろうか。

ところで、先土器時代は、縄文時代や弥生時代と異なり、時代名称にその内容が表現されているので、文化を議論する際に、引きずられてしまう。佐原 眞が「岩宿時代」を使う理由に、「日本も、岩宿・縄紋・弥生・・・と固有の名称をつけておき、「これは中国・ヨーロッパのこの時代に対応する」と説明する方が、はるかに明快であって、誤解や混乱をまねかずにすむ」（佐原 1987a、33頁）と指摘することには納得がいくし、時代名称に意味内容を込めない、中立的な表現の方が使いやすいと思う。

それから、筆者は、時代と文化は、本来、区別して使われる用語と考えている。例えば、本州の弥生文化と北海道の続縄文文化とは時間的に併行関係にあるとか、あるいは西日本で弥生文化、弥生時代がはじまっても、東北地方では、しばらくの間、縄文文化が継続しているということなどは、土器の研究者が得意とする相対編年網に基づく、水平な時代区分によって、はじめて表現できることではないかと思う。したがって、各地域で弥生文化がはじまると、それぞれの地域で弥

生時代もはじまるというのではなく、北部九州で弥生文化がはじまるのと同時に、その後弥生文化の及んだ範囲については弥生時代のはじまりだと考えている。ただし、縄文文化のはじまりに関する議論では、縄文文化の継起した時代を縄文時代として、時代と文化については深入りせず、先に進みたい。

2 縄文文化のはじまりと時代区分

さて、縄文文化、あるいは縄文時代のはじまり、起源については、土器の果たした役割が、その後の文化を大きく規定したのだから、土器の出現こそが、最も重要なイベントである、という考えが提示され、現在に至るまで、この考えが主流になっている（小林達1982）。そして、土器の出現によって画されることで、縄文時代に先行する時代は、1950年代は無土器時代、1960年代以降は、先土器時代と旧石器時代の二つの時代名称が主流となり、概ね同義語化していった。

現在、多くの研究者が縄文文化のはじまりとする神子柴系石器群については、その標識的資料と言える青森県長者久保遺跡や長野県神子柴遺跡が発掘調査された際に、出土資料に土器が含まれていなかったことから、無土器時代の終末期とされていた。これも、ヨーロッパの旧石器時代ないしは中石器時代に対比されるという考えと、大陸（シベリア）の新石器時代に対比される「無土器新石器時代（今から5000年前）」という考え方があり、時代名称として、無いもので規定することからの脱却に加えて、無土器新石器時代とは見解を異にすることを明確にする意味もあって、前者の考えをもつ多くの研究者は、無土器時代から、先土器時代あるいは旧石器時代へと変えていったのかも知れない。

その後、茨城県後野遺跡や青森県大平山元 I 遺跡で無文土器（文様不明の土器）が見つかったことにより、神子柴系石器群は、縄文時代草創期へと編入された。

そして、大平山元 I 遺跡の2回目の調査によって出土した土器が、新たに開発された炭素14による年代測定方法（AMS）と測定値の較正の結果、今から16,500年前に遡ることが公表され、事態は変化した。

現在、更新世と完新世の境界は、グリーンランドの水床コア等のデータから、今から約11,700年前とされている。つまり、従来の、あるいはヨーロッパの時代区分では、この11,700年前が旧石器時代と新石器時代（あるいは中石器時代）との境界になる。

そうすると、今から16,500年前の大平山元 I 遺跡出

土の土器は、最終氷期の晩氷期よりも古く、更新世と完新世の境界よりも5千年近くも遡ることになる。また、環境に相当左右されていた可能性の高い狩猟、採集による石器時代にあつて、更新世と完新世を大きく跨いで同じ時代、文化とすることになる。

大平山元 I 遺跡を発掘調査した谷口康浩は、神子柴系石器群（長者久保・神子柴石器群）に伴う無文土器や刺突文土器等から隆線文土器、爪形文土器、多縄文土器に至るまでの、更新世に位置付けられる「縄文時代草創期」を縄文時代から切り離して「旧石器-縄文移行期」とし、撚糸文土器の時期から縄文時代と提言している（谷口 2011）。その理由として、a) 竪穴住居の普及と集落の増加、b) 貝塚の出現と漁撈技術の確立、c) 植物食加工具、とくに石皿・磨石類の定着、d) 土器使用量の増大、e) クリの集約的利用ならびに植物栽培開始の可能性、f) 土器型式の地域性の顕現、g) 黒曜石などの遠隔地産品の搬入量の増加、h) 土偶の発生と増加の8項目を列挙したうえで、「これらの諸様相から窺えるのは、定住化への傾向が強まり、高度な植物利用と漁撈を主軸とする生業の基本形態が定まるとともに、一定の領域を地盤とする地域社会の形成によって集団関係や交換経済にも変化が生じ始めた、そのような生活全体の構造的な変化」をあげている（同書、201-202頁）。これに、縄文時代早期の土器と、地質、古環境を、炭素14の測定年代等によって関連付けている。

ただし、「旧石器-縄文移行期」の開始は神子柴系石器群（長者久保・神子柴文化）であり、土器の出現に画期が置かれている。また、「移行期」の土器を何と呼ぶのかは、明示されていない。

今から40年以上前になるが、年代測定や自然環境等に関連する自然科学の研究状況が、今とはかなり異なっていた当時、宮下健司は、日本における「土器出現期」²⁾の文化期を、I期（隆起線文系／爪形文系）、II期（押圧縄文系／回転縄文系）、III期（撚糸文系）に区分した上で、晩氷期以降の花粉帯、生物遺存体、土器の機能、生業³⁾等を検討し、「関東地方に展開した土器出現期における撚糸文土器を製作、使用した社会は前代に較べて大きな集団で大地に固着する定住的、植物採集、漁撈、狩猟社会といえることができる。・・・（中略）・・・この文化構造はその後の縄文時代全般に継承されてゆくことから、撚糸文土器を使用した人々の創造した文化には、「縄文文化とは何か」という問いに対する解答が含まれているのではないだろうか」

また「土器出現期を3文化期に分け、それぞれの自然環境や文化複合体を詳細に検討するとともに、先土器時代や縄文時代早期以降の文化内容を比較検討する中で、縄文文化の起源や文化構造、時代区分を位置づけたい」としている（宮下 1980、148頁）。

以上のように、宮下は、考古資料と自然環境等の資料を詳細に検討し、縄文文化の画期について、谷口と同様の結論を導き出している。また、勅使河原彰も縄文時代は熱糸文土器の時期からとしている⁴⁾。

いずれにしても、生業や行動形態等から考えると、縄文文化は熱糸文土器の時期からという結論が得られている。

筆者もまた、縄文時代のはじまり、縄文文化に対する考え方は、基本的に、谷口や宮下、勅使河原と同じで、縄文文化は、狩猟、漁撈、植物性食料の利用という3部門の生業が、それぞれ成熟し、各地域の環境、条件に応じて、特定の生業に偏りを見せたり、あるいは3つの生業がバランスをとったりするなど、可変的な構造が形成された文化と考えている。特に、漁撈と植物性食料の利用は、完新世における環境の変化とあいまって、定住⁵⁾の大きな要件だったと考えられる。可視的現象としては、石鏃等の狩猟用具、銛、ヤス、釣針等の漁労用具、磨石・石皿等の植物性食料の加工用具等、様々な道具が発生し発達したこと、貝塚の形成、半地下式の居住用建物や貯蔵穴等の施設が作られたことなどがあり、土器の多様化と量的に裏付けられた安定的な使用を含めて、大局的には「定住型狩猟採集民の文化」と考えられる。

そして、その開始は、関東中部地方においては、多縄文土器の後半から熱糸文土器にかけての時期で、これが縄文文化、縄文時代のはじまりと考えている。

一方で、近年の炭素14年代測定によると、更新世と完新世の境界と、多縄文土器後半から熱糸文土器初期にかけての測定年代とは概ね一致し、したがって、それよりも古い神子柴系石器群に伴う土器から、隆線文土器や爪形文土器、多縄文土器前半期の土器は、更新世に帰属し、縄文時代に先行する時代の土器ということになる。縄文時代から切り離すので、「縄文土器」とは異なる名称が必要になると思う。

3 縄文土器について

ところで、縄文時代は、縄文式土器時代という考えからはじまっていた。弥生時代も同じで、それぞれ縄文土器、弥生土器という遺物によって規定された時代

だった。

山内清男は、「地方差、年代差を示す年代学的の単位-我々が型式と云って居る-を制定し、これを、地方的年代的に編成して、縄紋土器の形式網を作ろう。この新しい基準によって土器の製作、形態装飾を縦横に比較して土器の変遷史を作ることが出来るであろう。そしてその結果に照らして所謂縄紋土器全般を見直すことが出来るであろう。」（山内 1932）と提言している。

大塚達朗は、こうした山内の見解を受け、「縄紋土器とはそのような開放系の縦横連鎖構造と簡潔に定義できるであろう」（大塚 1989）としている。

林謙作も、縄紋土器について、「完新世の日本列島、あるいはそれに近い条件のもとでの資源利用のシステムが成立した時代が縄紋時代で、その狩猟採集の社会の住民が製作・使用した土器」と定義した上で、型式の存在と成立を必要条件にあげ、隆線文土器を最古の縄紋土器にあてている（林 1993）。小林謙一も同様の見解を提示している（小林謙 2011）。

つまり、大別と細別の編年網に組み込まれ、相互に緊密な関係にある一連の土器型式群が縄文土器ということになるのだろう。

一方、弥生土器については、土器研究を推進してきた佐原 眞が、「弥生文化は、日本における食料生産による生活が開始された最初の段階の文化である。縄紋文化が食料採集を基盤としたことと対照をなす。日本で食料生産とは、すなわち稲作である。」その前提に立ち、「弥生文化の時代が、「弥生時代」である。弥生文化の土器が「弥生土器」である」とした。また、「研究の出発点で、縄紋土器・弥生土器は明確に識別された。しかし、今やそれは不可能である。もし、縄紋土器を使った時代・文化が縄紋時代・文化、という学史的に正しいもとの定義をいまなお使おうというのなら、たとえば、早期の尖底土器、中期の火炎土器、晩期の亀ヶ岡式土器、「晩期」の夜臼式土器に共通し、弥生I期（前期）の板付式土器と異なる性質をあげねばならない。土器をもとに文化・時代におよぶ旧来の定義をすてて文化を先に定義し、その文化の土器を弥生土器とよぶ」（佐原 1987b、4-5頁）としており、したがって、例えば、佐賀県業畑遺跡において、突帯文系土器の一つとして九州の縄文時代晩期中葉に位置付けられる「山ノ寺式土器」に水田遺構が伴った時、生業・経済によって時代を区分する立場では、山ノ寺式土器は「弥生土器」になるし、一方で、縄文土

器としての分類を堅持する立場では、「縄文土器」として型式設定された山ノ寺式土器が、突如、弥生土器になってしまうことは、「縄文土器」としての分類の主体性がなくなりかねないこともあり、受け入れがたいようである。

これは、更新世の土器にも言えることで、生業の面から縄文文化を考えると、撚糸文土器が画期になり、それに先行する土器は縄文土器とは言いにくくなるし、縄文土器を起点にした縄文文化では、全国に広く分布し、地域と時間の単位となる型式が成立したとされる隆線文土器以降の土器群は縄文土器となる。

4 千葉県における更新世後半から終末期の様相

それでは、縄文時代に先行する時代をどのように考えるか。まず、当該期の内容について、身近な千葉県の状況を見てみたい。

千葉県では、市原市草刈遺跡C区において、武蔵野ローム層最上部から石器群が出土している。ただし、当該資料は小規模なブロックが1か所で、出土資料も28点にすぎず、ほかに類例も見られないことから、この時期の詳細はわからない。

その上位から出土する石器群については、立川ローム層X層から立川ローム層Ⅲ層中部にかけて、概ねナイフ形石器を主体とする石器群が見られる。

石器群の内容は、石刃とナイフ形石器、一般的な剥片と端部整形石器、台形石器、切出形石器が順次変遷しつつ、これに削器や搔器、彫器、角錐状石器等が加わり、これに石器の不足を補うかのように、両極剥片が見られる。

石器石材を含めると、立川ローム層X層では、県南産と想定される頁岩類やチャート、安山岩等を主体とする剥片石器群が中心である。

ただし、市原市草刈六之台遺跡第1文化層では栃木県高原山産と神津島産の黒曜石、四街道市御山遺跡第Ⅱ文化層では北関東産と想定される珪化した頁岩・凝灰岩等が含まれている。理化学的な分析は行っていないが、草刈遺跡D区第2文化層（立川ローム層X層相当）では信州産黒曜石、御山遺跡第Ⅱ文化層でも高原山産黒曜石と想定される資料があり、黒曜石の利用は立川ローム層X層からはじまると考えられる。一方、柏市聖人塚遺跡第5文化層、御山遺跡第Ⅱ文化層、酒々井町飯積原山遺跡第1文化層では、石刃あるいは石刃を素材とする基部調整のナイフ形石器が搬入品として含まれている。

立川ローム層Ⅹ層は、「環状ブロック群」の盛行する時期で、刃部磨製石斧が特徴的であるが、剥片石器については、①県南産各種石材と北関東産の黒曜石、流紋岩等による一般的剥片と台形石器、②北関東産の頁岩、凝灰岩による石刃とナイフ形石器が、それぞれ別個に（台形石器群：四街道市池花南遺跡第1文化層、ナイフ形石器群：市原市押沼大六天遺跡第1文化層）、あるいは両者が組合わさって（柏市中山新田Ⅰ遺跡下層）見られる。石刃石器群、剥片石器群ともに、県内の遺跡に石核等を持ち込んで、素材生産からの石器製作を行っている。

その後、立川ローム層Ⅶ層上部からⅥ層にかけては、急激な寒冷化による環境の悪化に伴って、移動範囲が広域になったと推定され、磐越高地産頁岩（東北産頁岩）、群馬県産黒色頁岩と、信州産黒曜石（おもに霧ヶ峰～和田峠周辺）を集中的に消費する石器群が見られる。前者は芝山町香山新田中横堀遺跡が典型例で、石器の完成品とその素材（大型石刃）を携帯し、欠損を補修する石器群である。素材の生産は石材の原産地周辺で行われたと想定される。一方、後者は八千代市権現後遺跡第4文化層が典型例で、持ち込まれた石核は、徹底的に使い尽くされている。

Ⅳ下・Ⅴ層の石器群、砂川期石器群は、県南産と想定される各種石材（安山岩、流紋岩、頁岩、凝灰岩、砂岩、チャート、瑪瑙・玉髄など）と、群馬県西部（「黒色安山岩」、「黒色頁岩」）から栃木県（黒曜石、安山岩、流紋岩、頁岩、凝灰岩）、茨城県北部（安山岩、頁岩、瑪瑙・玉髄）の石材のいくつかが組合わさって構成されている。

田村 隆、国武貞克は、石器石材の原産地を追求するとともに、県内各遺跡出土の石器群について基礎データを作成し、ナイフ形石器を主体とする時代の人々が、下野-北総回廊をメインルートとして、千葉県南部と北関東（西は群馬県から東は茨城県北部までの範囲）、あるいは磐越高地等との間を往還する状況を明らかにした（田村 2005、国武 2008、田村ほか 2010）。

田村、国武の成果によると、ナイフ形石器を主体とする時代、当時の人々は、石器石材の採集地（原産地）を取り込んだ形で、下総-北総回廊を中心とした範囲（活動領域）を季節的に周回移動していたと想定されている。同時に、石器石材の原材（石核）と、素材剥片、石刃、未成品、完成品等を携帯し、滞在地で石器を補充し、状況に応じて石材の補給をも行った、

遊動型狩猟採集民の文化とすることができる。また、主たる石材原産地から遠く離れた下総台地では、ナイフ形石器を主体とする時期の遺跡は、その内容が、数量の多寡を別とすれば、よく似た状況を示している。それは県内の遺跡間で連鎖するものではなく、千葉県に遺跡を残した各集団が、県南から北関東まで、南北200kmを定期的に往還したある期間に居住した結果と想定される⁶⁾。

ところが、立川ローム層Ⅲ層上部の、槍先形石器を主体とする石器群が出現すると、変化が生じる。

「東内野型尖頭器」に後続する槍先形石器群の時期、『研究紀要22』で提示された下総台地の尖頭器編年第4期（落合・永塚 2001）では、千葉県内に特定石材の完成品と未成品、素材（剥片）、石核等がまとまって持ち込まれ、石器の製作が行われたと考えられる。黒曜石製の槍先形石器群については、蛍光X線分析により、大網白里市大網山田台No.1遺跡、芝山町浅間台遺跡では高原山産黒曜石、船橋市西の台遺跡では信州産（和田峠周辺）黒曜石、成田市東峰西笠峰遺跡では信州産（八ヶ岳）（8点）と高原山産（2点）との結果が得られ、各地の黒曜石を用いた、片面調整や周辺調整を主体とする小型の槍先形石器が見られる（二宮・島立 2001）。

四街道市池花遺跡第3文化層の石器群は、高原山産黒曜石による小型の槍先形石器と、東北産頁岩による中型両面調整の槍先形石器が見られるが、基本的に完成品や素材の搬入と部分的な調整加工、修正等に限定され、本格的な製作作業は原産地周辺と想定される。

石器群を構成する石材を見る限り、ナイフ形石器群のように、周回移動の中で原石を補給しつつ、滞在地で素材と製品を製作する方式とは大きく異なる内容と考えられる。

一般に、槍先形石器は、製作にあたり、調整加工による石材のロスが多い。また、両面調整の槍先形石器は、大型の原石から数点しか製作できない。したがって、石器製作技術が、石刃など規格性の高い素材を重視したものから加工を重視したものへ転換すると、製作作業は原産地周辺で行い、完成品とそれを補う未成品とを携帯して移動することが効率的で、例えば、稲田孝司の「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」こそが、その状況を物語っている。また、藤野次史も槍先形尖頭器群に狩猟具から見た社会の変革期を指摘している。

その次の時期には、出自来歴の異なると想定される

二つの細石刃石器群が、日本列島を二分する形で見られる。九州地方から関東地方にかけては、稜柱形や粗い舟底形を呈する細石刃核を指標とする西南日本型の細石刃石器群があり、千葉県では、成田市十余三稲荷峰遺跡（信州産黒曜石）、酒々井町飯積原山遺跡（神津島産黒曜石）、袖ヶ浦市美生遺跡群第6地点（県南嶺岡産頁岩）など、石材に偏りが見られる。一方、北海道地方から関東・中部地方、あるいは西日本の中国山間部などにかけては、湧別技法による削片系細石刃核を指標とする、東北日本型の細石刃石器群⁷⁾があり、千葉県では、佐倉市木戸場遺跡をはじめ多くの遺跡で、東北産頁岩を中心に用いられている。千葉県は、この二つの細石刃石器群の交差する地域である。

細石刃石器群は、日本列島だけではなく、北東アジアに広く展開しており、それまでのような季節的周回移動の連鎖だけでは説明できない。その背景には、ナイフ形石器群とは異なる人の移動と生業の違いを越えた広域の情報ネットワークが存在したのであろう⁸⁾。

神子柴系石器群については、野田市本郷遺跡、千葉市六通神社南遺跡、成田市円妙寺遺跡などわずかであるが、本ノ木型尖頭器を指標とする石器群は、柏市元割遺跡、千葉市弥三郎第2遺跡、四街道市木戸先遺跡、富里市南大溜袋遺跡など、出土資料のまとまる遺跡も散見される。基本的に、完成品が搬入され、欠損後は再加工がなされている。

以上のように、槍先形石器を主体とする石器群が出現すると、狩猟具としての発達、それを支える石器製作技術とほかの器種を含めた技術的な構造全体が前時期と比べて変化するとともに、特定の石材原産地と結びついた、直線的な移動へと行動形態も変化している。それは、槍先形石器群にとどまらず、細石刃石器群、さらには神子柴系石器群、有茎尖頭器を含む石器群等にも継続すると考えられる。ナイフ形石器の時代以来の、数か所の石材原産地を取込んだ形の季節的周回移動は想定できない。縄文時代に先行する時代は、非定住的狩猟採集民ではあっても、主に石器石材から見た行動形態については、大きく二つに分けて考えられる。

5 更新世後半から終末期の時代区分と時代名称

ここでは、縄文時代に先行する時代について、どのように時代、あるいは文化を区分し、それを何と呼ぶか、この2点について、考えてみたい。

縄文時代に先行する時代は、今まで、岩宿時代、無土器時代、前縄文時代、先縄文時代、先土器時代、旧

石器時代と呼ばれてきた。また、土器の出現する時期については、縄文時代と弥生時代、弥生時代と古墳時代との境界に比べて過渡的な性格が強調され、縄文時代草創期のほかに、原土器時代（船形石核による細石器文化および有茎尖頭器文化）、あるいは晩期旧石器時代ないしは中石器時代（有舌尖頭器ほか）、旧石器－縄文移行期という用語が設定されてきた⁹⁾。

平口哲夫は、岩宿発見以来の石器時代の用語を整理し、縄文時代とそれに先行する時代との区分については、「日本の場合、土器の出現をもって石器時代を二分するのは、いまのところ最も無理のない方法」としている。そのうえで、ヨーロッパの上部旧石器時代に相当する当該期の時代名称について、学会では、先土器時代と旧石器時代とに二分されていたが、「日本の考古学的時代区分としてすでに定着した縄文・弥生・古墳時代に照らして考えてみたい。三者のおもな共通点として、第一にその時代の代表的な遺構・遺物に由来すること、第二に日本独自の名称であること、第三にそれ自体としては年代や経済基盤などの時代性を規定するものではないこと」から検討し、第三には抵触するものの、旧石器時代に統一すべきこと、また、「日本の石器時代区分において旧石器時代＝先土器時代とした場合、芹沢氏の晩期旧石器時代を縄文時代草創期とし、代わりに土器出現に先行する細石刃文化期を旧石器時代晩期とするならば、縄文草創期、先土器時代、旧石器時代の各提唱者の系譜を折衷した時代名称・区分を実現することになろう」と提言している（平口 1982、104・107頁）。この見解が「座散乱木遺跡」発見以降、あるいは現在に至っても、最も主流な考え方となっている。

これを受けるように、『岩波講座 日本考古学』では、時代名称として「先土器時代」を採用しつつ、旧石器時代、あるいは先土器（旧石器）時代が併用され、旧石器時代と先土器時代の同義語化が一層明瞭となった。

一方で、佐原 眞は、岩宿遺跡発見時に杉原荘介によって提唱され、その後10年ほどの間に角田文衛によって再度提唱されていた「岩宿時代」を三たび提唱し（佐原 1987a）、さらに、鈴木忠司も、時代名称の研究史を整理した上で、岩宿時代が最も適当な時代名称としている（鈴木 1990）。

宮城県を中心に「前期旧石器」が発見され認知されると、急速に先土器時代は使われなくなり、旧石器時代という用語にほぼ統一された。先土器時代という用語は、例えば、中東の新石器時代初期に、農耕ははじ

まっているが土器のない時代を「先土器新石器時代（Pre Pottery Neolithic）」ということもあり、50万年前を先土器時代と呼ぶことに抵抗があること、従来以上に国際的交流が増え、外国で用いられている旧石器時代の方が理解されやすいなどの理由もあったようである。

「捏造事件」が発覚すると、織笠 昭は、時代名称の歴史を整理し、再度先土器時代を使うことを提言するが（織笠 2001）、圧倒的に多くの研究者は、旧石器時代の名称を継続して使用している。日本の研究者が今から3万年前よりも古く遡る石器になじみがあまりなく、それが捏造を見抜くことができなかつた要因の一つでもあったと思われるので、国際交流の必要性がさらに高まり、旧石器時代が使われているのかも知れない。

佐藤宏之は、時代名称について、旧石器時代の日本列島は、古本州島と大陸と接続していた古北海道半島に大別されることから「少なくとも、環日本海地域の旧石器文化等を等しく呼称可能な「旧石器時代」のほうがより有効である。北海道を視野に入れるかぎり、列島起源の非国際的名称をサハリンや韓国といった隣接地域に適用するわけにはいかない」と述べ、先土器時代や岩宿時代ではなく、旧石器時代の適用を主張している（佐藤 2010、61頁）。

一方、土器が出現して、一定の期間については、縄文時代草創期という名称が用いられているが、佐藤宏之は、当該期を旧石器時代から縄紋時代への移行期として捉え、従来の技術形態論に加えて機能論・生態適応論上の観点を設ける必要性が高いことを説き、遊動型狩猟採集民の生計戦略から定住型狩猟採集民の生計戦略へ転化し、定住性の獲得が図られたとしている。そして、更新世から完新世への列島規模での環境の不安定な変化に各地域社会が適応して独自の環境適応の道を模索する段階で、関東地方の集団は、北方系削片系細石器石器群を保有する集団のもたらした内水面漁撈を生業システム中に採用することにより、ひとつの定住型狩猟採集戦略を開発したと指摘している（佐藤 1993）。これ以降、移行期という考えが広まり、定着することになる。

炭素14年代の測定値を較正して年代値とする現在、土器出現に先行する石器群は、海外の旧石器時代に相当すると考えられているが、大平山元Ⅰ遺跡の土器が今から16,500年前だとすると、更新世に帰属し、旧石器時代の土器ということになる。しかし、これを縄文

時代のはじまりとすると、今度は、日本の旧石器時代は更新世の終末までではなく、今から16,500年前までとなり、その後続く縄文時代は、更新世（5,000年間）と完新世（8,500年間）を跨ぐことになる。

そもそも、日本で旧石器時代という用語を採用した背景は、外国との対比、あるいは整合性が強調されたはずであったのに、このままでは、「日本の」旧石器時代と言わなければならない。

それならば、佐原の提唱したように、縄文時代以降と同様に、日本独自の時代名称により、その時代が外国のどの時代に対比されるか、と議論した方が良く思う。

現在、土器の出現を境に、旧石器時代と縄文時代を区分する研究者が圧倒的に多く、移行期を採用しても、やはり土器の出現をメルクマールにしている。しかし、筆者は、土器の出現によって、時代あるいは文化が変わった、あるいは時代が変わる重要なきっかけになったとは考えていない。先述したとおり、完新世のはじまる、関東地方の撚糸文土器の時期から定住型狩猟採集の時代として縄文時代とし、それに先行する時代については、季節的周回移動を行っていたナイフ形石器群の時代と、槍先形石器群にはじまり、細石刃石器群や土器出現初期に至るまでの、行動形態が異なると考えられる時代とに、分けて考えたいと思っている。

おわりに

現在の時代区分は、土器を伴わない細石刃石器群までを旧石器時代として、土器の出現を画期とする見解が大多数を占めている。撚糸文土器の時期には、文化的な画期があるものの、時代としては区分していない。また、土器の出現から撚糸文土器に先行する多縄文土器までは、移行期とする考え方が多いが、その表現、あるいは位置づけは、縄文時代草創期、あるいは旧石器時代とも縄文時代とも明示しない、または両時代から切り離れた「移行期」としている。表現を別にすれば、比較的共通した認識がなされている。ただし、筆者の考えは別で、それは以下のとおりである。

- 1 縄文文化は、狩猟、漁撈、植物採集の生業が一体となった定住型狩猟採集民の文化で、縄文時代のはじまりは、関東地方では撚糸文土器からと考える。
- 2 縄文時代よりも前の、非定住型狩猟採集民の時代は二分する。
- 3 ナイフ形石器の時代は、季節的周回移動による遊動型狩猟採集民の時代で、岩宿時代と呼称したい。

4 岩宿時代に後続する、槍先形石器群と細石器石器群、出現期の土器等に示される時代は、どのような活動領域と行動形態をとるのかわからないが、きわめて広域な文化的事象が見られる激動の時代であり、強いて名称を探れば神子柴時代になろうか。

これは、結論というよりは、検討すべき課題と目標とを込みにした、筆者の立ち位置である。突っ込みどころ満載、何か一つでも議論の対象になればと願う。

最後に、文献の検索等で、下記の方々にお世話になりました。感謝いたします。

大内千年、橋本勝雄、蜂屋孝之（敬称略）

付記

脱稿後、本稿の趣旨に関係する下記の文献を知った。今後、検討したい。

大塚達朗 2016「消費される縄文文化」『物質文化』第96号、89-110頁、物質文化研究会

長沼正樹 2005「日本列島における更新世終末期の考古学研究 - 縄文文化起源論と旧石器終末期研究の学説史に着目して -」『論集忍路子』I、57-73頁、忍路子研究会

注

- 1) 近藤義郎は、考古学研究会による時代区分のシンポジウムにおいて、閉会にあたり、次のようにも発言している。「考古学の時代区分ですので、解釈の結果ではなくて、あるいは評価ではなくて、物によって表現すべきであると思います。だから、米作りとか稲作とか生産経済というようなことから、あるいは、もう一人の方がおっしゃったような、中央勢力とか部族同盟とか、そういうものでは考古学の時代区分はできない・・・(中略)・・・考古学的時代区分の指標は米作りではなくて水田の跡である・・・(中略)・・・中央勢力とか部族同盟ではなくて、前方後円墳の出現で画さなくてはいけない・・・」(近藤 1986 a、122-123頁)。
- 2) 宮下の「土器出現期」は、作業仮説上の時期区分用語で、縄文時代草創期、早期初頭、原土器時代、晩期旧石器時代に相当するとしている(宮下 1980)。
- 3) この背景には、「時代区分は歴史観の具体的な表現であり歴史認識の基礎をなすものであるかぎり、どこまでも客観的でなければならない」とした上で、「各文化要素に示される経済、文化が構造的に関連しあう生産様式をもって時代区分をしなければならない」としている(宮下 1976 b、25頁)。
- 4) 勅使河原彰は、「縄文文化というのは、さまざまな道具を開発した列島の石器時代人が、狩猟・植物採取・漁撈活動における利用の手段と技術を確立させ、それら三つの生業部門を密接に組み合わせることによって、この列島の四季の変化に対応した食料獲得を容易にさせ、定住化をはかった時代と定義する。とすれば、縄文文化の成立の画期は、撚糸文系土器の出現する時期こそふさわしいということになり、それ以前の土器群の時期、つまり小林の区分にいう「草創期」は、

縄文時代への移行期として、それ以前の時代、つまり旧石器時代に位置づけるべきだと考えている」(勅使河原 1998、51頁)。

- 5) 西田正規は、定住について、遊動生活者は定住を望んでいたのではなく、定住生活は、遊動生活が破綻した結果なされたという視点に立ち、定住するため、定住のもたらす経済的メリットとして、①魚類資源の活用、それも労働力が少なくてすむ定置漁具による漁撈、②食料の大量貯蔵を中心とする。また、後氷期の環境変化により植物性食料の利用(クリ、シイ、ヒシなど澱粉質ナッツ)も大量貯蔵により効果をあげたとしている(西田 1984)。
- 6) 千葉県北半部(下総台地)には、良質な石器石材が見られないことから、当時の遊動範囲は、石材原産地との関わりで考えることができる。一方、武蔵野台地や相模野台地では、遺跡近傍の河川に石器石材と同種の礫が見られることから、それを利用しつつ、河川流域に小規模な移動による遺跡群を形成したと考えられている。はたして、下総台地に遺跡を残した人々は、年間200kmに及ぶ距離を移動し、武蔵野台地や相模野台地では10km程度(これは定住の範囲では)の移動とあるのだろうか。下総台地に遺跡を残した人々は、印旛沼周辺が良好な狩猟の場であっても、移動に関して、それほどまでにマイナスの要因をもっていたのだろうか。
- 7) 北方系細石刃石器群は、日本列島内部にあっては、生業との関連で拡散したのかも知れない。しかし、ザバイカル周辺から中国内蒙古自治区、沿海州、日本と、相当広域に分布することを考えると、共通点はあったとしても、どこでも同じような生業をしていたとは考え難い。
- 8) 遠隔地石材について、蛍光X線分析によると、細石刃石器群では、山形県湯の花遺跡の資料に北海道白滝産の黒曜石が含まれ(建石ほか 2014)、大型の槍先形石器群については、千葉県六通神社南遺跡の資料に奈良県二上山産サヌカイト、岐阜県の下呂石(湯ヶ峰流紋岩)が見られる(薬科 2003)など、それまでにはない特殊な状況が発生していたと想定される。
- 9) 時代区分の問題について、統一されなかった例として、八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒監修の『新版考古学講座第3巻 先史文化』がある。副題に「無土器から縄文」と記されているが、時代ごとの章立ては「先縄文時代」となっており、さらに、「先縄文時代」の内容について、「旧石器時代」と表現されている(芹沢 1978)。

参考文献

- 安斎正人 1994「縄文文化の発現－日本旧石器時代構造変動論(3)－」『先史考古学論集』第3集、43-82頁、安斎正人
- 大塚達朗 1989a「窩紋土器の意義」『利根川』10、1-6頁、利根川同人
- 大塚達朗 1989b「縄文土器の起源」研究に関する原則『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』5-36頁、渡辺仁教授古稀記念論文集刊行会、(株)六興出版
- 大塚達朗 2018「縄文土器型式と“予定表”」『縄文時代』第29

- 号、1-23頁、縄文時代文化研究会
- 稲田孝司 1969「尖頭器文化の出現と旧石器の石器製作の解体」『考古学研究』第15巻第3号、3-18頁、考古学研究会
- 稲田孝司 1986「縄文文化の形成」『岩波講座 日本考古学第6巻 変革と画期』65-117頁、岩波書店
- 稲田孝司 1993「細石刃文化と神子柴文化の接点－縄文時代初頭の集団と分業・予察－」『考古学研究』第40巻第2号、21-46頁、考古学研究会
- 稲田孝司 2001「IV 細石刃文化の波及から縄文文化の成立へ」『遊動する旧石器人 先史日本を復元する1』(稲田孝司・林謙作編)115-163頁、岩波書店
- (財)印旛郡市文化財センター 1994『千葉県四街道市木戸先遺跡 御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査』
- 小野正敏 1979「Ⅲ 原始・古代社会の様相 1 先土器時代の遺跡群と集団」『日本考古学を学ぶ』(3)、88-101頁、有斐閣選書842、(株)有斐閣
- 岡本東三 1986「先土器時代から縄紋時代へ」『考古学研究』第33巻第1号、82-89頁、考古学研究会
- 岡本東三 1994「縄文文化移行期石器群の諸問題」『環日本海地域の土器出現期の様相 1993年度日本考古学協会シンポジウム』(小野 昭・鈴木俊成編)59-75頁、雄山閣出版
- 岡本東三 2003「多岐亡羊の縄文文化起源論」『季刊考古学』第83号、14-17頁、(株)雄山閣
- 落合章雄・永塚俊司 2001「第1章 尖頭器石器群の分布と時間的推移 第3節 尖頭器石器群の編年」『千葉県文化財センター研究紀要』22、40-47頁、(財)千葉県文化財センター
- 織笠 昭 2001「先土器時代文化2001」『石器に学ぶ』1-56頁、石器に学ぶ会
- 加藤晋平 1981「旧石器時代の漁撈活動－先土器時代の経済活動を考える上で－」『信濃』第33巻第4号、1-12頁、信濃史学会
- 鎌木義昌 1966「縄文式土器・縄文文化の起源について」『岡山理科大学紀要』第2号、(1971『論集 日本文化の起源 第1巻 考古学』小林行雄編、172-190頁)
- (財)君津郡市文化財センター 1994『－千葉県袖ヶ浦市－美生遺跡群Ⅲ 第6・7地点』
- グレイサム・クラーク (増田精一監訳・小淵忠秋訳) 1989『中石器時代－新石器文化の揺籃期－』雄山閣出版
- 国武貞克 2008「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』第4号、83-98頁、日本旧石器学会
- 考古学研究会 1987「第33回考古学研究会総会 研究発表 討議」『考古学研究』第34巻第2号、56-65頁、考古学研究会
- 小林謙一・工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館 2011「IV 討論－縄文時代のはじまりをどうとらえるか－」『歴博フォーラム 縄文はいつから!?－地球環境の変動と縄文文化－』177-203頁、新泉社
- 小林達雄 1974「縄文土器の起源」『考古学ジャーナル』第100号、26-30頁、ニューサイエンス社
- 小林達雄 1982「総論」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ』(編集 加藤晋平/小林達雄/藤本 強)3-15頁、雄山閣出版

- 小林達雄 1986「日本列島旧石器時代文化の3時期について」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第11集、1-42頁、国立歴史民俗博物館
- 小林行雄 1951『日本考古学概説』東京創元社
- 近藤義郎 1966「後氷期における技術的革新の評価について」『考古学研究』第12巻第1号、10-15頁、考古学研究会
- 近藤義郎 1985「時代区分の諸問題」『考古学研究』第32巻第2号、23-33頁、考古学研究会
- 近藤義郎 1986a「考古学研究会東京シンポジウムの記録 閉会の辞」『考古学研究』第33巻第1号、122-123頁、考古学研究会
- 近藤義郎 1986b「総論」『岩波講座 日本考古学第6巻 変革と画期』1-24頁、岩波書店
- 近藤義郎 1989「日本における考古学的時代区分」『山梨考古学論集Ⅱ - 山梨県考古学協会10周年記念論文集 -』1-14頁、山梨県考古学協会
- 佐藤宏之 1992a『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤宏之 1992b「北方系削片系細石器器群と定住化仮説 - 関東地方を中心に -」『法政大学大学院紀要』第29号、55-83頁
- 佐藤宏之 2010「序論 二 旧石器時代研究の歴史」『講座日本の考古学1 旧石器時代(上)』40-73頁、青木書店
- 佐原 眞 1987a「岩宿時代の日本「岩宿時代」と考古学」『大系日本の歴史1 日本人の誕生』31-42頁、小学館
- 佐原 眞 1987b「概説・弥生文化の研究〔I〕I 弥生文化の性格」『探訪 弥生の遺跡西日本編〈有斐閣選書R〉』(佐原眞・工楽善通 編)1-9頁、(株)有斐閣
- (財)山武郡市文化財センター 1994『大網山田台遺跡群Ⅰ - 旧石器時代篇 -』
- 杉原荘介 1953「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』第39巻第2号、21-25頁、日本考古学会
- 杉原荘介 1967「日本先土器時代の新編年に関する試案」『信濃』第19巻第4号、1-4頁、信濃史学会
- 杉原荘介 1974『日本先土器時代の研究』講談社
- 鈴木忠司 1985「縄文草創期石器群小考」『考古学ジャーナル』第256号、24-30頁、ニューサイエンス社
- 鈴木忠司 1990「先土器・旧石器そして岩宿時代」『古代学研究所研究紀要』第1号、1-17頁、古代学研究所
- 芹沢長介 1956「日本に於ける無土器文化」『人類学雑誌』第64巻第3号、31-42頁、日本人類学会
- 芹沢長介 1962「旧石器時代の諸問題」『岩波講座 日本歴史1 原始及び古代〔1〕』77-107頁、岩波書店
- 芹沢長介 1967「旧石器時代の終末と土器の発生」『信濃』第19巻第4号、5-12頁、信濃史学会
- 芹沢長介 1972「縄文土器の起源」『サイエンス SCIENTIFIC AMERICAN 日本版』第2巻第5号、18-35頁、日本経済新聞社
- 芹沢長介 1978「先縄文文化」『新版考古学講座第3巻 先史文化 無土器から縄文』(八幡一郎・大場磐雄・内藤政恒監修)23-46頁、雄山閣出版
- 建石 徹・加藤 稔・渋谷孝雄・会田容弘・小菅将夫・二宮修治 2014「山形県湯の花遺跡出土黒曜石資料の産地分析」『岩宿』第3号、7-15頁、岩宿博物館
- 谷口康浩編 1999『大平山元Ⅰ遺跡の考古学的調査 旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探究』大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団
- 谷口康浩 2011『縄文文化起源論の再構築』同成社
- 田村 隆 1989「遠い山・黒い石」『先史考古学論集』第2集、1-46頁、安斎正人
- 田村 隆 2005「この石はどこからきたか - 関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて -」『考古学』Ⅲ、1-72頁、安斎正人
- 田村 隆・国武貞克・吉野真如 2003「下野 - 北総回廊外縁部の石器石材(第1報)」『千葉県史研究』第11号、1-11頁、千葉県
- 田村 隆・山岡磨由子・川端結花・青山幸重 2010「房総半島の後期旧石器時代石器群(上)」『千葉県立中央博物館研究報告 - 人文科学 -』第11巻第2号、109-227頁、千葉県立中央博物館
- (財)千葉県文化財センター 1984a『八千代市権現後遺跡 - 萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ -』
- (財)千葉県文化財センター 1984b『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ - No.7遺跡 -』
- (財)千葉県文化財センター 1985『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ - 成田地区 -』
- (財)千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ - 元割・聖人塚・中山新田Ⅰ -』
- (財)千葉県文化財センター 1987『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡 - 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -』
- (財)千葉県文化財センター 1991『四街道市内黒田遺跡群 - 内黒田特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- (財)千葉県文化財センター 1994a『千原台ニュータウンⅥ - 草刈六之台遺跡 -』
- (財)千葉県文化財センター 1994b『四街道市御山遺跡(1) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ -』
- (財)千葉県文化財センター 1999『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ - 東峰西笠峰遺跡(空港No.63遺跡) -』
- (財)千葉県文化財センター 2000『主要地方道成田松尾線X - 芝山町浅間台遺跡 -』
- (財)千葉県文化財センター 2001『千葉県文化財センター研究紀要』22
- (財)千葉県文化財センター 2003『千葉東南部ニュータウン26 - 千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡 -』
- (財)千葉県文化財センター 2004『千原台ニュータウンX - 市原市草刈遺跡(東部地区旧石器時代) -』
- (財)千葉県教育振興財団 2006a『千原台ニュータウンXⅤ - 市原市押沼大六天遺跡(下層) -』

- (財)千葉県教育振興財団 2006b『成田国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X X II - 十余三稲荷峰遺跡(空港No.67遺跡-)』
- (公財)千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡1旧石器時代 奈良時代~中・近世編-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2-』
- (財)千葉市文化財調査協会 1992『土気南遺跡群II 弥三郎第2遺跡』
- 角田文衛 1959「無土器文化の名称について 日本古代学の諸問題(一)」『古代文化』第3巻1号、1-6頁、(財)古代学協会京都事務所
- 勅使河原彰 1978「II 考古学研究の基礎的方法 2 時代区分論」『日本考古学を学ぶ』(1)、24-35頁、有斐閣選書840、(株)有斐閣
- 勅使河原彰 1987「考古史料による時代区分-その前提的作業-」『考古学研究』第33巻第4号、91-120頁、考古学研究会
- 勅使河原彰 1998「第1章 縄文文化の成立」『縄文文化』新日本新書488、13-61頁、新日本出版社
- 堤 隆 1998「日本列島の氷期の終末と人類の適応システム」『シンポジウム:更新世-完新世移行期の比較考古学 発表要旨』(小野昭編)35-53頁、東京都立大学人文学部史学科考古学研究室、国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室
- 土肥 孝 1982「縄文文化起源論」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器I』(編集 加藤晋平/小林達雄/藤本 強)17-41頁、雄山閣出版
- 戸沢充則 1987「先土器・縄文時代の時期区分と時代区分-学史を中心にして-」『考古学研究』第34巻第2号、18-26頁、考古学研究会
- 戸沢充則 1984「日本の旧石器時代」『講座日本歴史1 原始・古代1』(歴史学研究会・日本史研究会編)39-73頁、(財)東京大学出版会
- 西田正規 1984「定住革命-新石器時代の人類史的意味-」『季刊人類学』第15巻第1号、3-27頁、京都大学人類学研究会
- 二宮修治・島立 桂 2001「第3章 自然科学的手法による分析-蛍光X線による房総半島出土尖頭石器器群の黒曜石原産地推定-」『千葉県文化財センター研究紀要』22、65-100頁、(財)千葉県文化財センター
- 野田市本郷遺跡調査団 1980『野田市本郷遺跡発掘調査報告書』
- 橋本勝雄 1988「三 縄文文化起源論」『論争・学説 日本の考古学 第2巻 先土器・縄文時代I』(桜井清彦・坂詰秀一編)101-136頁、雄山閣出版
- 林 謙作 1994「縄文土器のはじまり」『環日本海地域の土器出現期の様相 1993年度日本考古学協会シンポジウム』(小野昭・鈴木俊成編)31-44頁、雄山閣出版
- 濱田耕作 1922『通論考古学』大鏡閣
- 春成秀爾 1976「先土器・縄文時代の画期について(一)」『考古学研究』第22巻第4号、68-92頁、考古学研究会
- 春成秀爾 2001「旧石器時代から縄文時代へ」『第四紀研究』第40巻第6号、517-526頁、日本第四紀学会
- 平口哲夫 1982「日本石器時代区分の現状と課題」『考古学研究』第29巻第2号、103-110頁、考古学研究会
- 福澤仁之 1998「最終氷期以降の東アジアの気候変動の復元」『シンポジウム:更新世-完新世移行期の比較考古学 発表要旨』(小野昭編)17-18頁、東京都立大学人文学部史学科考古学研究室、国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室
- 藤野次史 2007「狩猟具から見た旧石器時代社会の変容と交流-後期旧石器時代後半の様相を中心として-」『考古学研究』第54巻第3号、4-19頁、考古学研究会
- 藤山龍造 2005「氷河時代終末期の居住行動」『日本考古学』第20号、1-23頁、有限責任中間法人日本考古学協会
- 船橋市遺跡調査会 1985『西の台(第2次)-船橋市西の台遺跡発掘調査報告書』
- 宮下健司 1976ab「縄文文化起源論争史をめぐる諸問題(上)(下)」『信濃』第28巻第3号、65-77頁、第28巻第4号、15-29頁、信濃史学会
- 宮下健司 1980「土器の出現と縄文文化の起源(試論)-自然環境の復元と土器の機能を中心にして-」『信濃』第32巻第4号、119-155頁、信濃史学会
- 安田喜憲 1980『環境考古学事始 日本列島2万年』(NHKブックス365)、日本放送出版協会
- 安田喜憲 1987『世界史のなかの縄文文化』(考古学選書26)雄山閣出版
- 山内清男 1932「第一 日本遠古之文化 I 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』第1巻第4号、40-43頁(1997『先史考古学論文集(一)』1-4頁、(株)示人社)
- 山内清男 1937「第二 縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号、29-32頁(1997『先史考古学論文集(一)』45-48頁、(株)示人社)
- 山内清男 1960「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯、1-2頁、國學院大学考古学会
- 山内清男 1969「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号、4-22頁、東京国立博物館
- 山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』第14巻第12号、1-13頁、読売新聞社
- 山本忠尚 1983「日本考古学と時代区分-その現状分析と日本史研究者へのメッセージ-」『文化財論叢』、937-962頁、奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会、同朋舎出版
- 薬科哲男 2003「附章 六通神社南遺跡出土安山岩製石器の原産地分析」『千葉東南部ニュータウン26-千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡-』153-168頁、(財)千葉県文化財センター